

# 子どものソシオメトリック仲間関係と道徳判断の発達

前 田 健 一

(幼児心理学研究室)

(平成4年4月27日受理)

子どもの仲間関係に関する研究は、仲間から拒否されたり無視される子どもがどのような社会的行動を示すのかについて検討してきた (Hymel & Rubin, 1985 ; Schneider, Rubin, & Ledingham, 1985)。これらの研究によると、一般に仲間から拒否される子どもは攻撃的・破壊的・非協調的行動や逸脱した不適切な行動を示しやすく、仲間から無視される子どもは仲間との会話や相互作用が少なく、引っ込み思案傾向にあると指摘されている。社会的スキル欠如仮説 (例えば, Asher, Rensaw, & Hymel, 1982) では、仲間から受容されない子どもは肯定的な仲間相互作用を行うのに必要な社会的知識や社会的行動を欠いていると考えている。確かに、行動レベルで適切に自己を表現できなければ、どんなに優れた知識や意図・目的をもっていてもそれを相手にうまく伝えることができない。その意味で、適切な社会的スキルやコミュニケーション・スキルを習得することは対人関係を円滑に行う上で不可欠な要素である。しかし、問題は社会的知識や社会的行動レベルの欠如だけに限定されない。社会認知的スキルを調べた研究は、拒否児や無視児のような非人気児や攻撃児が人気児や非攻撃児よりも他者の意図を誤って認知しやすいと報告している (Dodge, 1980 ; Dodge & Frame, 1982 ; Dodge, Murphy, & Buchsbaum, 1984)。

Dodge, Murphy, and Buchsbaum (1984) は、ソシオメトリックテストに基づいて子どもの仲間内地位を分類し、拒否児や無視児が人気児や平均児に比べて、行為者の意図を誤って認知しやすいことを見いだしている。彼らは、2人の子ども間の相互作用を描いたビデオ録画を幼稚園児、小学2年生、小学4年生に見せた。ビデオ録画は、Aの子どもがBの子どものおもちゃや遊具を壊す場面を描いていた。その際Aの子どもの行動意図について、以下の5つの条件を設定した。①敵意の意図をもって壊す条件、②向社会的意図をもって壊す条件、③不慮の意図、つまり過失で壊す条件、④曖昧な意図をもって壊す条件、⑤Aは自分の遊具を壊し、Bに壊したと文句を言う条件。その結果、行為者の意図を正しく同定する課題では、人気児の正答率が最も高く、拒否児や無視児は人気児や平均児よりも低い傾向にあった。さらに、拒否児や無視児は人気児に比べて、向社会的意図や不慮の意図を敵意の意図と誤って認知していた。また、自分の遊具を壊されたときにどのように反応するかを質問したところ、人気児は拒否児や無視児に比べて、行為者の意図を確認するために行為者に「弁明を求める」ことが多かった。これらの結果は、拒否児や無視児の意図認知が不正確であるだけでなく、意図を正しく認知するために必要な情報を求めようとせず、結果的に認知の歪みを引き起こし、敵意の意図によると決めつけやすいことを示唆している。こうした社会的認知の不適切さと歪みが彼らの否定的な対仲間行動を引き起こし、仲間から拒否されたり無視される結果を生じさせていると考えられる。

本研究の研究Ⅰでは、ピアジェ型の道徳判断課題を使用して、判断者の仲間内地位によって行為者の意図や動機を重視する程度に違いが見られるか否かを検討した。道徳判断課題を使用する理由は、否定的結果を与えた行為者を許容するか非難するか判断は、行為者の意図認知だけでなく、否定的結果の重大さにも依存すると考えたからである。例えば、損害の大きい否定的結果を与えた場合には、たとえ行為者の意図が向社会的であると分かっている、怒りが生じたり、行為者を許容できないと判断するかもしれない。道徳判断課題では、行為者の意図の良悪だけでなく、否定的結果（損害）の程度を変化させ、判断者が意図と結果の重大さのどちらを重視するかを調べることができる。したがって、否定的結果を同程度にした Dodge, Murphy, and Buchsbaum (1984) の研究結果が否定的結果の程度が異なる場合にも一般化できるか否かを検証できる。

ところで、仲間の行動を評価したり、行動の原因や意図を推測する場合、その行為者の特性に関する先行知識や情報が重要な役割を果たす。Dodge and Frame (1982) は、幼稚園児から小学5年生の子どもを対象にして、対象児の知っている攻撃男児または非攻撃男児を行為者とする物語を提示し、その行動意図について説明させている。その結果、子どもは非攻撃男児よりも攻撃男児の行動を敵意の意図に基づくものであると説明する傾向にあった。さらに、こうした意図帰属のバイアスは認知者が非攻撃男児であるよりも攻撃男児である場合に強く、また行為者の行動が他の仲間ではなく自分に向けられているときに顕著であった。仲間評価に及ぼす社会的情報の先行提示効果を検討した Waas (1991) も、対象児自身が関与する自我関与情報は関与しない他者関与情報よりも仲間を評価するときに利用されやすいことを見いだしている。また Hymel (1986) は、行為者の仲間内評判と同様に、認知者と行為者の好き嫌い関係が仲間の行動意図に関する原因帰属に影響することを報告している。すなわち、行為者が否定的行動を行う場合には、好きな仲間よりも嫌いな仲間の行動に対して行為者に責任があり、非難されるべきだと説明する傾向にあった。これらの研究結果は、認知者の仲間内地位だけでなく、行為者の仲間内評判に関する先行知識や情報、仲間行動に対する自我関与の程度、仲間に対する感情的態度（好き嫌い）などが仲間の行動意図の解釈や原因帰属に影響することを示している。

本研究の研究Ⅱでは、ソシオメトリックテストを使用して子どもの好き嫌い関係を事前に調査し、道徳判断課題の行為者が判断者の好きな仲間であるか嫌いな仲間であるかによって、行為者の意図や動機を重視する程度に違いがあるか否かを検討した。Hymel (1986) の結果は、子どもが好きな仲間を嫌いな仲間よりも有利に解釈することを示した。研究Ⅱは、好きな仲間に対する有利な解釈が道徳判断課題でも見られるか否かを検討すると共に、有利な解釈の仕方に発達差が見られるか否かを検討するものである。なお、判断者の仲間内地位が関与しないように、研究Ⅱでは判断者の大多数を平均児に統一した。

## 研 究 I

研究Ⅰの目的は、ソシオメトリックテストの結果に基づいて人気児、拒否児、無視児、平均児を選出し、これらの仲間内地位グループ間で行為者の意図や動機を重視した道徳判断の出現数が異なるかどうかを検討することである。もし、拒否児や無視児が他者の感情や意図を理解する能力に欠けていて、拒否されたり無視されたりするのであれば、一種の社会的認知課題で

ある道徳判断課題でも、拒否児や無視児では行為者の意図や動機を重視した動機論的判断が少  
ないのではないかと予想される。

## 方 法

**対象児** 松山市内の幼稚園児61名（平均6歳2か月）と小学2年生80名（平均8歳3か月）  
を対象にして、ソシオメトリックテストを実施した。その結果に対して後述の分類方法を適用  
し、各仲間内地位グループを選出した。表1は、その中から研究Iで対象とした各仲間内地位  
グループの人数内訳と分類基準を示したものである。

表1 研究Iの対象児の内訳

地位グループ	分 類 基 準	幼 児			小学2年生		
		男	女	計	男	女	計
人気児	$SP > 1, L > 0, D < 0$	4	6	10	8	7	15
拒否児	$SP < -1, L < 0, D > 0$	4	5	9	8	5	13
無視児	$SI < -1, L < 0, D < 0$	4	4	8	5	5	10
平均児	$-1 < SP < 1, -1 < SI < 1$	6	4	10	6	6	12
	合計	18	19	37	27	23	50

**実験計画** 2（年齢：幼児、小学2年生）×4（地位グループ：人気児、拒否児、無視児、  
平均児）の要因計画を用いた。両要因とも被験者間要因である。

**材料** 使用した例話対は全部で8対であり、すべて(a)意図良－損害大の話と(b)意図悪－損害  
小の話から成っていた。これら8対は、対人損害－故意型、対人損害－過失型、対物損害－故  
意型、対物損害－過失型の4つの型から構成されており、各型につき2対ずつ含まれた。対人  
損害とは、行為者が相手に対して、精神的または身体的な損害や負担を与える場合である。対  
物損害とは、相手や第3者の持ち物などが汚れたり破損する場合である。また、故意型とは行  
為者が行為の結果を予期して作為的に行為する場合であり、過失型とは作為はなかったが結果  
的に損害を与えた場合である。なお、例話の内容をよく理解させるために、例話の意図に関す  
る部分と結果に関する部分をそれぞれ白黒の線画に描いた絵カードを2枚作り、例話と一緒に  
紙芝居風に提示した。表2は、各例話型における例話対を1例ずつ示したものである。各例話  
中、①の部分が意図部分で、②の部分が結果部分である。

**手続き** (1)ソシオメトリックテスト：幼児には個別面接で、小学生にはクラスの名簿（同性  
のみ）を印刷した用紙を提示して集団で実施した。各対象児は、同性の仲間の中から、幼稚園  
または学校で遊ぶとき一緒に遊びたい人3名と遊びたくない人3名を指名するように指示され  
た。

(2)道徳判断課題：ソシオメトリックテストから約2週間後、個別に実施した。すべての対  
象児に対して、2人の架空の行為者間でより悪い子を判断させ、その後で判断の理由について  
答えさせた。まず次の教示を与えて、やり方を説明した。「今から、お話を2つずつ読んで聞  
かせます。どちらのお話にも〇〇ちゃんと同じ位の年の子どもがでできます。お話をよく聞いて、  
初めのお話にてできた子どもと2番目のお話にてできた子どもを比べて、どちらの子ども  
がより悪い子だと思うか教えて下さい。」この教示の後、実験者は線画を提示しながら、各例

表2 研究IとIIで使用した例話対の一例

## 対人損害－故意型

(a)意図良－損害大の例話：①〇〇ちゃん(くん)は、小さな子が三輪車に乗っているのを見て、押してあげようと思いました。ところが、②あんまり強く押しすぎたので、その子はころんで、大声で泣いてしまいました。

(b)意図悪－損害小の例話：①〇〇ちゃん(くん)は、小さな子が三輪車に乗っているのを見て、急に押して驚かそうと思いました。そしたら、②その子はころびそうになり、少し泣きそうな顔になりました。

## 対人損害－過失型

(a)意図良－損害大の例話：①〇〇ちゃん(くん)は、洗濯をしているお母さんのお手伝いをしてあげようと思いました。洗った洗濯物を入れたカゴを運んでいるとき、つまづいてころんでしまいました。②洗濯物は、全部下に落ちて汚れてしまいました。お母さんは、もう一度全部洗わなくてはならなくなりました。

(b)意図悪－損害小の例話：①〇〇ちゃん(くん)は、洗濯をしているお母さんのそばで、お母さんの止めものもきかず走り回って遊んでいました。そのうち、②持っていた棒が、干してある洗濯物の1つにあたり、下に落ちて汚れてしまいました。お母さんは、もう一度洗わなくてはならなくなりました。

## 対物損害－故意型

(a)意図良－損害大の例話：①〇〇ちゃん(くん)が公園の花だんの前を通りかかると、花だんにたくさん草がはえているのに気がつきました。それで、②草むしりをしていると、間違えて植えてある花までたくさん抜いてしまいました。

(b)意図悪－損害小の例話：①〇〇ちゃん(くん)が公園の花だんの前を通りかかると、きれいな花がたくさん咲いていました。〇〇ちゃん(くん)は、どうしても欲しくなりました。それで、②「取ってはいけない」と言われていたのに、1本取って帰りました。

## 対物損害－過失型

(a)意図良－損害大の例話：①〇〇ちゃん(くん)は、お母さんのお手伝いをして、お盆にコップを10個のせて部屋に運んでいました。②部屋のドアを開けようとしたとき、手がすべってお盆を落とし、コップは10個とも、みんな割れてしまいました。

(b)意図悪－損害小の例話：①〇〇ちゃん(くん)は、お母さんの留守に内緒で戸棚の中のお菓子を食べようとした。でも、お菓子は高い所であって手が届きません。②無理に取りようとしたら、そばのコップに触ってコップが1つ落ちて、割れてしまいました。

話を読んで聞かせた。対象児が各例話内容を理解したことを確認した後、「A(1番目の例話の主人公名)とB(2番目の例話の主人公名)とでは、どちらが悪い子だと思いますか。」と質問し、判断を求めた。それから、「どうして、A(B)が悪い子だと思いますか。」と質問し、判断理由について言及させた。なお、対象児の性別と行為者の性別は一致させた。例話対の提示順序は、4つの型を1ブロックとする2通りの順序を用意し、各地位グループの対象児間でカウンターバランスした。また、8対の例話中、(a)意図良－損害大の例話を最初に提示するか(b)意図悪－損害小の例話を最初に提示するかは、各対象児内でカウンターバランスした。

**仲間内地位グループの分類方法** Coie and Dodge (1988)の方法に従った。対象児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数を集計した。次に、各指名数を各クラスの男女別に本人を除く残りの人数で除算し、仲間一人当たりの平均指名数を算出した。これを年齢別に、男児合計または女児合計の平均値とSDに基づいて標準得点化した。この2つの標準得点(肯定的指名得点=L, 否定的指名得点=D)から、社会的好み得点(SP=L-D)と社会的影響力得点(SI=L+D)を算出した。これらの得点を基に、表1の分類基準に従って各地位グループを選出した。

## 結 果

各例話対について動機論的判断をした場合に1点を、さらにその判断理由として行為者の意図や動機について言及した場合に1点を与えた。判断得点と理由得点間で Pearson の相関係数を算出したところ、幼児で  $r = .86$ ,  $d f = 35$ ,  $p < .01$ , 小学2年生で  $r = .81$ ,  $d f = 48$ ,  $p < .01$  となり、いずれも高い正の相関を示した。これは、判断得点と理由得点の変動パターンが極めて類似していることを示している。そこで、以下では判断+理由得点(16点満点)と判断得点(8点満点)の分析結果について報告する。

(1)判断+理由得点 図1は、判断+理由得点の平均値を示したものである。なお、予備分析の結果から性差は有意でなかったため、図1では各グループの男女を一括した平均値を示している。判断+理由得点について、2(年齢)×4(グループ)の分散分析を行なった。その結果、年齢の主効果が  $F(1, 79) = 60.18$ ,  $p < .001$  で有意となり、幼児 ( $M = 8.16$ ) < 小学2年生 ( $M = 13.88$ ) であった。グループの主効果も  $F(3, 79) = 4.19$ ,  $p < .01$  で有意となった。各グループの平均値は、大きい順に人気児 ( $M = 13.16$ ), 平均児 ( $M = 11.59$ ), 無視児 ( $M = 10.33$ ), 拒否児 ( $M = 10.27$ ) であった。Duncan の new multiple range test による多

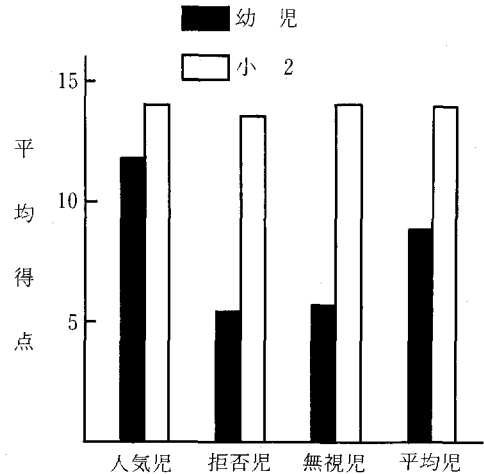


図1 各地位グループの判断+理由得点の平均値

重比較をしたところ、人気児 > 無視児 ≒ 拒否児 ( $p < .05$ ) であったが、平均児はいずれのグループとも有意差がなかった。また、年齢×グループの交互作用が  $F(3, 79) = 3.57$ ,  $p < .05$  で有意であった。そこで、多重比較をしたところ、幼児では人気児 ( $M = 11.80$ ) ≒ 平均児 ( $M = 8.90$ ) > 無視児 ( $M = 5.75$ ) ≒ 拒否児 ( $M = 5.44$ ) であった(有意差はすべて  $p < .05$ ) が、小学2年生では人気児 ( $M = 14.07$ ) ≒ 無視児 ( $M = 14.00$ ) ≒ 平均児 ( $M = 13.83$ ) ≒ 拒否児 ( $M = 13.62$ ) であった。また、各グループ別に年齢差を検定したところ、人気児では幼児 ≒ 小学2年生であったが、他の3グループでは幼児 < 小学2年生であった。

(2)判断得点 表3は、判断得点の平均値とSDを示したものである。予備分析の結果から性差は有意でなかったため、表3でも各グループの男女を一括した平均値を示している。表3に基づいて、2(年齢)×4(グループ)の分散分析を行なった。その結果、年齢の主効果が  $F(1, 79) = 51.81$ ,  $p < .001$  で有意となり、幼児 ( $M = 4.62$ ) < 小学2年生 ( $M = 7.36$ ) であった。グループの主効果も  $F(3, 79) = 3.86$ ,  $p < .05$  で有意となった。各グループの平均値は、大きい順に人気児 ( $M = 6.88$ ), 平均児 ( $M = 6.55$ ), 無視児 ( $M = 5.61$ ), 拒否児 ( $M = 5.55$ ) であった。多重比較の結果は判断+理由得点と同様に、人気児 > 無視児 ≒ 拒否児 ( $p < .05$ ) であったが、平均児はいずれのグループとも有

表3 各地位グループの平均判断得点 ( )内はSD

グループ	幼 児	小学2年生
人気児	6.10 (1.58)	7.40 (1.31)
拒否児	3.11 (2.02)	7.23 (1.89)
無視児	3.63 (2.23)	7.20 (1.17)
平均児	5.30 (2.10)	7.58 (1.38)

意差がなかった。なお、年齢×グループの交互作用は $F(3, 79) = 2.64$ ,  $p < .10$ で有意傾向を示した。念のため多重比較をしたところ、幼児では人気児≒平均児>無視児≒拒否児の傾向にあるが、小学2年生では4つのグループ間に差が見られなかった。また、各グループ別に年齢差を検定したところ、人気児では幼児≒小学2年生であるが、他の3グループでは幼児<小学2年生の傾向にあった。

(3)相関値 表4は、幼児37名および小学2年生50名のデータに基づいて、月齢および各仲間内地位得点と道徳判断得点との相関係数を示したものである。表4から、月齢は幼児でも小学2年生でも道徳判断得点と有意な相関を示さなかった。仲間内地位得点では幼児のL得点が道徳判断得点と有意な正の相関を示したが、小学2年生では両者間に有意な相関は見られなかった。また、幼児のL得点は故意型よりも過失型の例話対における道徳判断得点と高い正相関を示す傾向にあった。

表4 月齢および仲間内地位得点と道徳判断得点との相関係数

		判断得点			判断+理由得点		
		故意型	過失型	全体	故意型	過失型	全体
幼児 (N=37)	月齢	.08	.11	.11	.05	.11	.09
	L得点	.28+	.52**	.45**	.32*	.60**	.51**
	D得点	-.08	-.29+	-.21	-.06	-.25	-.17
小2 (N=50)	月齢	-.07	-.09	-.08	-.05	-.23	-.14
	L得点	.15	.23	.19	.19	.20	.21
	D得点	-.03	-.09	-.06	-.07	-.01	-.05

+ :  $p < .10$    \* :  $p < .05$    \*\* :  $p < .01$

## 考 察

図1や表3から分かるように、小学2年生ではどの地位グループもかなり高い得点を示し、地位グループ間差が見られなかった。また表4から、小学2年生ではL得点もD得点も道徳判断得点と有意な相関を示さなかった。これらの結果は、小学2年生になると、本研究で使用した道徳判断課題では拒否児でも無視児でも十分に動機論的判断ができ、人気児や平均児との間に差が生じないことを示している。表3の平均判断得点はいずれのグループでも7点以上であり、満点に近い値を示している。このことから、小学2年生にとって本研究の道徳判断課題は容易すぎて、仲間内地位グループ間の差異を反映しきれなかったものと考えられる。一般に7歳頃を境にして、子どもの道徳判断が結果論的判断から動機論的判断へと移行すると報告されている(Karniol, 1978)。本研究の小学2年生は、これよりも少し発達が早いのかかもしれない。本研究の結果に関する限り、ピアジェ型の道徳判断課題は小学生以降の意図判断と仲間内地位との関連を検討するのに適した課題ではないと言わねばならない。しかし、意図判断の程度は使用した例話対の内容によっても影響されるので、別の例話対を使用して再検討すべきである。

幼児では拒否児や無視児が人気児や平均児よりも有意に低い得点を示した。この結果は、拒否児や無視児が、意図は良くても損害の大きい例話の行為者を悪いと判断しやすいことを意味している。意図良を向社会的意図とみなすと、この結果は向社会的意図を敵意の意図と誤認知しやすいことを見いだした Dodge, Murphy, and Buchsbaum (1984) の研究結果が、否定的

結果の程度が大きい場合にはより生じやすい可能性を示唆する。この可能性を検討する今後の研究では、本研究のような道徳判断対を使用しないで、意図良一損害大の例話と意図良一損害小の例話を比較させるとか、Dodge, Murphy, and Buchsbaum (1984) のように単一例話を提示し、その否定的結果を変化させてみると有益な結果が得られるであろう。表4から、幼児の道徳判断得点はL得点と有意な正相関を示したが、D得点とは有意な相関を示さなかった。この結果は、仲間拒否の程度よりも仲間受容の程度が行為者の意図や動機を重視する道徳判断と密接に関連することを示している。D得点の高い拒否児とD得点の低い無視児が共に低い道徳判断成績を示したのは、道徳判断得点がL得点のみと関連していたからであろう。拒否児と無視児はどちらも結果を重視し意図判断をしない点で共通していたが、両者の意図認知における質的相違については明確にできなかった。なぜ拒否児は仲間相互作用で攻撃的反応を示しやすく、無視児は引っ込み思案傾向を示しやすいのかを説明するためには、両者の意図認知における質的相違を明らかにし、意図認知の内容と社会的行動との関連を詳細に検討していく必要がある。

地位グループ別に年齢差を見ると、幼児の人気児はすでに動機論的判断ができる小学2年生と同程度の成績を示した。しかし、平均児、拒否児、無視児では有意な年齢差が見られた。特に、拒否児や無視児では顕著な年齢差が見られたことから、これらのグループは人気児や平均児に比べて、動機論的判断の発達が遅れていると指摘できる。これは、認知発達の遅滞仮説と一致する。この仮説を検討した研究者(Chandler, 1973; Selman, 1980)によると、子どもは発達と共に社会的役割取得スキルや視点取得スキルを習得するが、社会的に逸脱した行動を示す子どもは他の普通の子どもよりも、こうしたスキル習得が遅れると報告されている。他者の意図や立場・役割を考慮できない子どもは、仲間との相互作用が自己中心的なものになりやすく、その結果仲間から受容されなくなるのであろう。

ところで、表4の相関値は行為者の意図が明確な故意型の例話対よりも意図の不明確な過失型の例話対の方が幼児のL得点と高い関連を示す傾向にあった。前田(1989)は、意図が明確な例話対では幼児でも意図を重視しやすいことを見いだしている。意図が明確であれば、不明確なときよりも意図に気づきやすく、それだけ結果に影響されにくい。意図が不明確なときに、人気児と拒否児および無視児との違いが生じやすいという本研究の結果は、Dodge (1980)の研究結果と対応している。Dodge (1980)は、小学2年生、4年生、6年生の攻撃男児と非攻撃男児を対象にして、対象児の知らない仲間から受けた否定的結果に対する行動的反応を観察した。その結果、攻撃男児と非攻撃男児の反応に相違が見られたのは、仲間の意図が曖昧なときに限られていた。曖昧な意図のとき、攻撃男児は仲間がまるで敵意の意図で行為したかのように攻撃反応で報復し、非攻撃男児は仲間がまるで親切的意図で行為したかのように反応した。それに対して、意図が明確な敵意の意図条件や親切的意図条件では、両グループの反応に差がなかった。Dodge (1980)と本研究の結果を考え合わせると、仲間内地位の低い子どもの意図認知スキルはすべての領域で欠けているのではないことを示唆する。多様な社会的場面を設定し、どのような場合に拒否児や無視児の意図認知スキルに問題が生じるのかについて明らかにしていかなければならない。特定の領域にしる、社会的認知スキルに問題をもつことが彼らの仲間行動を不適切にし、その結果仲間関係を不利なものにしている可能性があるからである。

## 研究 II

研究IIの目的は、道徳判断を行なう対象児と例話中の行為者との好き嫌い関係をソシオメトリックテストの結果に基づいて操作し、以下の予想を検証することである。対象児と例話中の行為者との好き嫌い関係について、3つの条件を設けた。条件Iでは、2つの例話に登場する行為者名はそれぞれ異なるが、いずれも対象児の知らない架空の人物であった。この条件Iは、通常の道徳判断課題で最も多く使用されているものである。条件IIは、対象児の好きな仲間名を意図良一損害大の行為者に割り当て、対象児の嫌いな仲間名を意図悪一損害小の行為者に割り当てた。条件IIIでは、条件IIと反対に、対象児の嫌いな仲間名を意図良一損害大の行為者に割り当て、対象児の好きな仲間名を意図悪一損害小の行為者に割り当てた。好きな仲間に対して有利な解釈(Hymel, 1986)と嫌いな仲間に対する不利な解釈が作用するならば、行為者の意図や動機を重視した動機論的判断は条件IIで最も多くなり、通常のタイプである条件Iは中間で、条件IIIで最も少ないであろうと予想される。

## 方 法

**対象児** 幼稚園児60名(平均6歳2か月)と小学2年生80名(平均8歳3か月)を対象にしたソシオメトリックテストの結果から、研究Iで対象としなかった幼児20名と小学2年生24名を選出し、幼児では10名ずつ小学2年生では12名ずつ条件IIと条件IIIに振り分けた。これらの子どもは幼児では平均児(18名)と敵味方児(2名)であり、小学2年生では全員平均児であった。なお、研究IIの条件Iは、幼児(10名)も小学2年生(12名)も共に研究Iの平均児グループのデータをそのまま使用した。

**実験計画** 2(年齢:幼児,小学2年生)×3(条件:I,II,III)の要因計画を用いた。両要因とも被験者間要因である。

**材料** 使用した例話対および線画は研究Iと同一であった。

**手続き** (1)道徳判断課題 ソシオメトリックテストから約2週間後、個別に実施した。条件Iでは、各例話対に対して、2人の架空の行為者間でより悪い子を判断させた。条件IIと条件IIIでは、各例話中の行為者名のところに、各対象児がソシオメトリックテストで選択した一緒に遊びたい人3名と遊びたくない人3名の名前を組み合わせ使用した。条件IIでは、(a)意図良一損害大の行為者名を対象児が遊びたいとして選択した仲間名にし、(b)意図悪一損害小の行為者名を対象児が遊びたくないとして選択した仲間名を当てはめた。条件IIIでは、各例話対の行為者名と仲間名の組合せを条件IIと逆にした。条件IIとIIIの対象児に与えた教示は、次のとおりである。「今から、お話を2つずつ読んで聞かせます。どちらのお話にも〇〇ちゃんの好きなお友達とあまり好きでないお友達がでできます。お話をよく聞いて、初めのお話にてできたお友達と2番目のお話にてできたお友達を比べて、どちらのお友達がより悪い子だと思いか教えて下さい。」その他の手続きは研究Iと同様であった。

## 結 果

各例話対について動機論的判断をした場合に1点を、さらにその判断理由として行為者の意



図や動機について言及した場合に1点を与えた。判断得点と理由得点間で Pearson の相関係数を算出したところ、幼児で  $r = .81$ ,  $df = 28$ ,  $p < .01$ , 小学2年生で  $r = .90$ ,  $df = 34$ ,  $p < .01$  となり、いずれも高い正の相関を示した。これは、判断得点と理由得点の変動パターンが極めて類似していることを示している。そこで、以下では判断+理由得点(16点満点)と判断得点(8点満点)の分析結果について報告する。

(1)判断+理由得点 図2は、各条件の判断+理由得点の平均値を示したものである。なお、予備分析の結果から性差は有意でなかったため、図2では各グループの男女を一括した平均値を示している。判断+理由得点について、2(年齢)×3(条件)の分散分析を行なった。その結果、年齢の主効果が  $F(1, 60) = 18.00$ ,  $p < .001$  で有意となり、幼児 ( $M = 8.33$ ) < 小学2年生 ( $M = 12.81$ ) であった。グループの主効果も  $F(2, 60) = 3.63$ ,  $p < .05$  で有意となった。各条件の平均値は、大きい順に条件II ( $M = 11.96$ )、条件I ( $M = 11.59$ )、条件III ( $M = 8.77$ ) であった。多重比較の結果、条件II ≧ 条件I > 条件III であった。なお、年齢と条件の交互作用は有意でなかった。

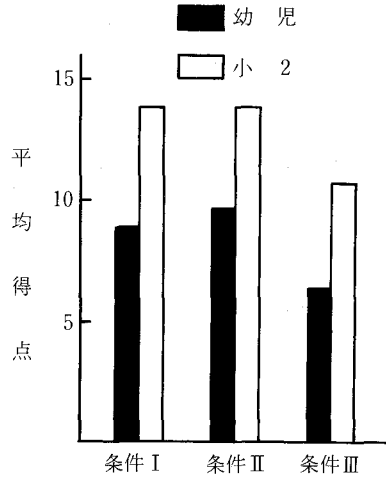


図2 各条件の判断+理由得点の平均値

(2)判断得点 表5は、各条件の判断得点の平均値とSDを示したものである。予備分析の結果から性差は有意でなかったため、表5でも各グループの男女を一括した平均値を示している。表5に基づいて、2(年齢)×3(条件)の分散分析を行なった。その結果、年齢の主効果が  $F(1, 60) = 13.80$ ,  $p < .001$  で有意となり、幼児 ( $M = 4.83$ ) < 小学2年生 ( $M = 6.89$ ) であった。

表5 各条件の平均判断得点  
( )内はSD

条件	幼児	小学2年生
条件I	5.30 (2.10)	7.58 (1.38)
条件II	5.00 (2.05)	7.25 (1.42)
条件III	4.20 (2.82)	5.83 (2.70)

条件の主効果は  $F(2, 60) = 2.44$ ,  $p < .10$  で有意傾向を示した。各条件の平均値は、大きい順に条件I ( $M = 6.55$ )、条件II ( $M = 6.23$ )、条件III ( $M = 5.09$ ) であった。念のため多重比較をしたところ、条件I > 条件IIIの傾向にあった。年齢と条件の交互作用は有意でなかった。

## 考 察

図2の判断+理由得点では、条件IIIが条件Iや条件IIよりも有意に低い得点を示した。表5の判断得点でも、条件IIと条件IIIの差は図2ほど顕著でなかったけれども、図2とはほぼ同様の傾向を示した。年齢と条件の交互作用が有意でなかったことから、これらの結果は幼児と小学2年生に共通するといえる。本研究の3つの条件で動機論的判断をするということは、意図良-損害大の行為者よりも意図悪-損害小の行為者の方が悪い子だと指摘することを意味する。したがって、条件IIでは好きな仲間-意図良-損害大の例話と嫌いな仲間-意図悪-損害小の例話とを比較し、嫌いな仲間-意図悪-損害小の行為者をより悪いと判断することになる。逆に条件IIIでは、嫌いな仲間-意図良-損害大の例話と好きな仲間-意図悪-損害小の例話とを

比較し、好きな仲間－意図悪－損害小の行為者をより悪いと判断することになる。おそらく、条件Ⅱでは好きな仲間－意図良の関係および嫌いな仲間－意図悪の関係に葛藤を感じないであろう。むしろ、行為者への好き嫌いとは行為者の意図が一致することによって、行為者の意図を重視する方向に相乗効果をもつと考えられる。したがって、条件Ⅱでは強調された意図良と損害大および強調された意図悪と損害小との葛藤を提供すると思われる。意図が強調されている分だけ、条件Ⅰよりも意図判断が生じやすいと予想した。それに対して、条件Ⅲでは嫌いな仲間－損害大の関係および好きな仲間－損害小の関係が対象児の感情的態度と一致するので、意図良と強調された損害大および意図悪と強調された損害小との葛藤を提供するであろう。したがって、条件Ⅲでは結果が強調される分だけ、行為者の意図を重視しなくなると予想した。

条件Ⅱと条件Ⅰに差がなかったことから、行為者に対する好き嫌い感情は行為者の意図を強調するのにそれほど役立たないといえる。それに対して、条件Ⅲが有意に低い得点を示したことから、行為者に対する好き嫌い感情は行為者の否定的結果を強調するのに大きな効果を及ぼすといえる。これは、条件Ⅲの対象児の中に、「この子はいつもこんなことをするのよ」といった表現がときどき観察されたことから裏付けられる。前田（1989）は幼児を対象にして、損害の程度差が大きい例話対では、程度差が小さい例話対よりも損害を重視し、動機論的判断が減少することを見いだしている。本研究の条件Ⅲは、前田（1989）の損害程度差大と同様の効果をもったものと考えられる。しかし残念ながら、条件Ⅲの結果は嫌いな仲間に対する不利な解釈によるのか、好きな仲間に対する有利な解釈によるのか、あるいは両者の相乗効果なのかを明らかにしてくれない。この点では Hymel（1986）の研究も同様である。Hymel（1986）は自分の好きな仲間と嫌いな仲間のそれぞれを行為者とする2つの条件を設定し、行為者の行動意図に関する原因帰属に差があることを見いだした。しかし、本研究の条件Ⅰのように架空の未知の行為者条件を設定していない。したがって、2つの条件間に差が見られても、それは好きな仲間の行動を有利に解釈する促進効果と嫌いな仲間を不利に解釈する抑制効果のどちらが強かったのかを明らかにできない。本研究では条件Ⅰが比較基準条件になると考えたが、例話対の組合せを考えると適切な比較基準条件とはいえないようである。好きな仲間に対する有利な解釈と嫌いな仲間に対する不利な解釈の程度が同等なのか、あるいはどちらか一方が強力に作用するのかについては、適切な比較基準条件を設定して再検討しなければならない。

本研究の結果は、好きな仲間に対する有利な解釈と嫌いな仲間に対する不利な解釈の程度を明らかにできなかったが、少なくとも好き嫌いの感情的態度が幼児の道徳判断に影響することを実証した。その意味で、本研究の結果は幼児の仲間関係の研究に対して次の示唆を提供する。人気児は多くの仲間から好かれているので、多くの仲間から有利な解釈を受ける可能性が強い。有利な解釈を受ける人気児は自分の主張や行動が仲間から受容されやすいので、仲間と否定的な相互作用をする必要がない。仲間とトラブルを起こしたり、けんかをするのが少ないので、人気児はますます仲間から受容されるという良循環が生じる。それに対して、拒否児や無視児は仲間から有利な解釈を受けることが少ない。そのため、彼らは自己の存在を認めさせるのに、より強い自己主張や行動を示さなければならない。無視児はこうした自己主張に乏しいので、ますます仲間から無視されることになり、拒否児は自己を主張するために不適切な攻撃行動を示し、仲間とトラブルを引き起こすのかもしれない。いずれにしても、彼らは悪循環に陥ることになる。こうした循環の輪を彼ら自身がいつ、どのようにして断ち切るか、仲間や外部からそれを援助する方途は何か、これらの問題を解決することは幼児の仲間関係の研究や大人の

介入援助研究にとって重要な課題である。

## 要 約

本研究では、幼児と小学2年生を対象にして、ピアジェ型の道徳判断課題を使用した2つの実験研究を報告した。研究Ⅰでは、行為者の意図や動機を重視する道徳判断得点とソシオメトリックテストに基づく仲間内地位との関連を検討し、研究Ⅱでは判断者と行為者の好き嫌い関係との関連を検討した。

研究Ⅰではソシオメトリックテストを実施し、その結果に基づいて人気児、拒否児、無視児、平均児を選出し、各グループの動機論的判断数について比較した。研究Ⅰの主な結果は以下のとおりであった。①幼児の拒否児や無視児は人気児や平均児よりも有意に低い得点を示した。②幼児の道徳判断得点は仲間受容を表すL得点と有意な正相関を示すが、仲間拒否を表すD得点とは有意な相関を示さなかった。③小2では仲間内地位グループ間に差がなく、L得点もD得点も道徳判断得点と有意な相関を示さなかった。④幼児の人気児は動機論的判断が最も多く、小学2年生と差がない程度に発達していた。⑤それに比べると、拒否児や無視児は動機論的判断の発達が遅れていた。⑥意図の不明確な過失型は意図の明確な故意型よりも、幼児のL得点と高い関連を示す傾向にあった。

研究Ⅱでは、判断者を平均児に統一し、判断者と行為者の好き嫌い関係について3つの条件を設定し、各条件の動機論的判断数について比較した。条件Ⅰは対象児の知らない架空の行為者間でどちらが悪い子かを比較する条件であり、通常其道徳判断課題で使用されている条件であった。条件Ⅱは好きな仲間－意図良－損害大の例話と嫌いな仲間－意図悪－損害小の例話を比較する条件であった。条件Ⅲは条件Ⅱと反対に、嫌いな仲間－意図良－損害大の例話と好きな仲間－意図悪－損害小の例話を比較する条件であった。研究Ⅱの主な結果は以下のとおりであった。①条件Ⅲは条件Ⅰや条件Ⅱよりも有意に低い得点を示した。②しかし、条件Ⅱは条件Ⅰと差がなかった。これらの結果について社会的認知や道徳判断に関する従来の研究と関連させながら考察した。

付記 本研究の資料収集にあたり快くご協力下さいました勝愛幼稚園並びに愛媛大学教育学部附属小学校の先生方、園児・児童の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集にあたっては與永さとみさんから多大な援助を受けました。ここに記して感謝の意を表します。

## 引用文献

- Asher, S. R., Renshaw, P. D., & Hymel, S. 1982 Peer relations and the development of social skills. In S. G. Moore & C. R. Cooper (Eds.), *The young child : Reviews of research*, Vol. 3, pp. 137-158. Washington, DC : National Association for the Education of Young Children.
- Chandler, M. J. 1973 Egocentrism and antisocial behavior : The assessment and training of social perspective-taking skills. *Developmental Psychology*, 9, 326-332.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school : A cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Dodge, K. A. 1980 Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, 51, 162-170.
- Dodge, K. A., & Frame, C. L. 1982 Social cognitive biases and deficits in aggressive boys. *Child Develop-*

- ment, 53, 620–635.
- Dodge, K. A., Murphy, R. R., & Buchsbaum, K. 1984 The assessment of intention–cue detection skills in children : Implications for developmental psychopathology. *Child Development*, 55, 163–173.
- Hymel, S. 1986 Interpretations of peer behavior : Affective bias in childhood and adolescence. *Child Development*, 57, 431–445.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationship and social skills problems : Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. J. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*. Vol. 2, pp251–297. Greenwich : JAI Press.
- Karniol, R. 1978 Children’s use of intention cues in evaluating behavior. *Psychological Bulletin* , 85, 76–85.
- 前田健一 1989 幼児の道徳判断に及ぼす結果の良悪と程度差の効果 愛媛大学教育学部紀要 第I部教育科学 第35巻, 165–175.
- Schneider, B. H., Rubin, K. H., & Ledingham, J. E. (Eds.) 1985 *Children’s peer relations : Issues in assessment and intervention*. New York : Springer-Verlag.
- Selman, R. L. 1980 *The growth of interpersonal understanding : Developmental and clinical analyses*. New York : Academic Press.
- Waas, G. A. 1991 Social information and the development of children’s peer evaluations. *Merrill-Palmer Quarterly*, 37, 407–424.